金末の山東の民乱について

林　章

はじめに

金末蒙古軍の侵入が激化するにつれて、華北の各地では叛乱が相つぐが、中でも山東を中心に金側から紅襖賊と称された一団が長期間にわたって活躍する。この紅襖軍に関して、中国では趙儻生「南宋金元之際山東、淮海地区中的紅襖忠義軍」①、李春圃・何林陶「関於李全的評価問題」②その他の論③があり、概して紅襖軍を宋に対する義軍とみなしているが、その経過を見ていると一概に義軍といいきれるものかどうか疑いなきをえない。わが国では大島立子氏に「金末紅襖軍について」④と題する論考があり、大島氏は紅襖軍は女真民族に抵抗した農民反乱軍であったことは認められるが、宋朝に対する忠義軍とは言い難いと述べられる。確に義軍とのみは言いえない面も多いので、どうしてそうならざるをえなかったのか、紅襖軍、その巨酋の李全に関してもう一度考えてみたいと思う。

一、叛乱の経過

金の西北辺は章宗の時代に入ると蒙古系遊牧民の侵入をしばしば被るようになる。そのため明昌三年（一一九

二）以後、莫大な費用と労力を投じて北辺に界濠を構築してこれに備え、また明昌六年（一一九五）以降は兵を動かして侵寇部族を伐っているが、このような界濠の構築、連年にわたる用兵は多額の費用を要するものであり、そのため金の財政は著しく疲弊⑤した。この金の財政難による弱体化を失地回復の好機ととらえたのが南宋において寧宗擁立の功を誇る韓侂胄であった。金の泰和四年（一二〇四）十一月以降、宋は陝西、河南の国境を侵し始める。こうして泰和六年（一二〇六）五月、両者は完全に断交して戦争状態に入るが、衰えたりとはいえ宋軍は金側の敵ではなく泰和八年（一二〇八）九月、金側の優勢の中に和議が成立する。この泰和年間の宋金の衝突に際して、早くも山東で群盗が蜂起⑥しているが、宋金間の和議が成立して平和が回復したのも束の間で、金は北からの蒙古軍の猛攻にさらされ、宣宗即位の第二年たる貞祐元年（一二一三）蒙古軍は中都を囲み、河北、山東の各地はその蹂躙するままになった。和議が成立して蒙古軍は翌貞祐二年四月には引きあげて行ったが、金では蒙古軍の重圧に耐えかねて汴京に遷都したので、背信を怒る蒙古軍の再度の侵入を招き、中都陥り、河北、山西の諸城また次々攻略されて、金室は僅かに河南、陝西に余喘を保つのみとなる。こうした金の弱体化に追討をかけるように、山東を中心に農民達の叛乱が続発する。この叛乱は二期に分けて考えられるが、その前期は、『宋史』巻四七六、李全伝に

初、大元兵破中都、金主竄、賦斂益横、遺民保巖阻思乱。於是劉二祖起泰安、掠淄、沂。二祖死、霍儀継之。彭義斌、石珪、夏全、時青、斐淵、葛平、楊徳広、王顕忠等附之。楊安児起、掠莒、密、展徽、王敏為謀主、母舅劉全為帥、汲君立、王琳、閻通、董友、張正中、孫武正等附之、餘寇蜂起。

とあるように、劉二祖、楊安児に率いられた二集団がその大なるものであった。このうち楊安児に関しては『金

史』巻一〇二、僕散安貞伝によると、泰和年間に反旗を鐫えしたが、後に金に降り、官刺史、防禦使を累ねるに至ったが大安三年（一二一一）に再び叛乱を起したと見られる。この後、益都で僕散安貞の軍に敗れて萊州、登州に至り、登州では刺史の耿格が安児を郊迎し帑蔵を発してこれを犒ったとあるから、ここに至って金朝の官吏までも叛徒に合流していたことになる。ここで耿格の助を借りて官属を置き天順と改元して自立の意志を表明しているが、この後、蒙古軍の北帰後、金側では山東の反乱平定に全力をあげてきたため各地で敗れて、賞金十万貫をかけられ貞祐二年（一二一四）十二月、舟で嶋岠山に逃れようとして途中で殺されている。一方の劉二祖も翌貞祐三年（一二一五）三月に金軍に破られて死んでいるから、貞祐初年に蜂起した山東の叛乱軍は、この時点では金側の弾圧のため一時摺伏を余儀なくされたものと思われる。こうした中で、貞祐二年汴京に遷都し、その後蒙古軍の侵攻が再開されたことで局面は一変する。金側の圧力の減退はとりもなおさず反乱軍の回復の好機であった。前記僕散安貞伝に

（貞祐）四年二月、楊安児餘黨復擾山東。……自楊安児、劉二祖敗後、河北残破、干戈相尋。其黨往往復相團結、所在寇掠、皆衣紅納襖以相識別、號紅襖賊。官軍雖討之、不能除也。大概皆李全、国用安、時青之徒焉。

とあってその間の事情を物語るが、『金史』巻一〇八、侯摯伝に

（貞祐四年）時紅襖賊数萬人入臨沂費県之境。官軍敗之、生擒偽宣徽使李寿甫、訊之則云、其衆皆楊安児劉二祖散亡之餘。今復聚及六萬。賊首郝定者兗州泗水人、署置百官、僭称大漢皇帝。

とあるとおり、ここでは郝定のもとに再び勢をもり返していたことが知られる。郝定はこの年七月に捕えられて

殺されているが、この年に一方では数万の紅襖軍が邳州を攻めている⑧し、翌興定元年（一二一七）から元光年間にかけて各地に跳梁を擅にする紅襖軍の姿が見られる。ただ元光二年（一二二三）十一月に紅襖軍偽監軍徐福等の来帰、邳州の紅襖軍三千の来降⑨等再び金側に恭順を示してくる例がだんだんと見られるようになるが、恐らくは宋側の受けいれの変化によるものであろうか。一方、李全であるが、『宋史』巻三八、寧宗本紀二、開禧元年（金、泰和五年、一二〇五）五月甲申条に

鎮江都統戚拱遣忠義人朱裕、結弓手李全焚漣水県。

とあって、早くも宋金の国境で宋軍に加わっている李全の名が見える。『宋史』李全伝によると、蒙古軍が山東に入った時、全の母及び長兄がこの戦乱の中で死んでいて、この後李全は仲兄の福と衆数千を集めて蜂起しているから貞祐二年のことと思われる。『金史』巻一二四、ボ甲脱魯灰伝によると盱眙の東北一帯を根拠にしていたようで、この後楊安児の敗死後その妹の四娘子を娶ってその餘衆を収めて山東一帯を荒しまわることになる。この後、宋の嘉定十一年（金、興定二年、一二一八）正月、宋側に降って⑩、この年の五月には山東の莒州、日照県、九月には寿光県と以後山東を中心に活動する李全の名が金史に散見するが、宋の宝慶二年（金、正大三年、一二二六）三月、蒙古軍のために青州で囲まれて攻囲一年、翌三年四月蒙古軍に降っている。以後は楚州を根拠として反金抗争を展開しているが、宋側から紹定三年（一二三〇）十二月に李全叛すときめつけられて⑪、この翌年正月楊州を攻めて敗死し、その妻の楊妙真が今度は宋に敵対したことが『金史』哀宗本紀に見える。

宋金の関係は、貞祐元年以降宋が歳幣の提供を停止して終うので、金側ではこれを機に北で失ったものを南で償おうという考えで貞祐五年（一二一七）四月南伐の軍を起し、主として淮水沿岸で宋軍と戦ったが、この回は⑫

むしろ押され気味で、翌興定二年（一二一八）十二月、使を派して和を講じようとして使者の入境を拒まれ、これ以降あてのない交戦が続く。この間宋軍を助ける紅襖軍に苦しめられたことは『金史』巻一一一、紇石烈牙吾塔伝に

（興定五年正月）上以紅襖賊助宋為害、辺兵久労苦、詔牙吾塔、遣宋人書求戦。略曰。宋與我国通好百年、於此頃歳以来納我叛亡、絶我貢幣。又遣紅襖賊、乗間竊出跳梁辺疆、使吾民不得休息。彼国若以此曹為足恃、請悉衆而来、一決勝負。

と見えることによっても知られる。このため正大二年（一二二五）ころには金は対宋消極策に転ぜざるをえなくなったようで、『金史』巻十八、哀宗本紀によると、この年の十月、宿州、泗州、青口の巡辺の官兵が淮河を渡って宋側に流れる紅納軍を擅殺することを禁じていることから見て、紅襖軍に対して手を拱いている様子が伺える。このような金側の態度が逆に紅襖軍に対する宋の扱い方を冷淡にさせて行ったのではないか。やがて反金抗争に大きな役割りを果していた紅襖軍は、元の支配下にその姿を消してゆくことになる。

二、叛乱の原因とその性格

泰和年間の宋金の衝突、北方からの蒙古民族の侵攻、特に貞祐初年の河北、山東への蒙古軍の侵入がこれら山東の民乱の直接的契機であったことは申すまでもない。ただ、叛乱の起る原因は早くから用意されていたのであって、例えば、大島氏も説かれたように[13]中国農民にとって何物にも換え難い宝である土地問題がある。皇統二年（一一四二）の宋との和議成立後多数の女真人が中原に移住させられる。彼等猛安謀克戸に割当てられた土地は、

元来は官地を振りあてるものであったであろうが、父祖代々耕作を続けてきた土地を没収される農民の立場に立てば、彼等の憤懣は想像に余りある。(14) 国家権力を背景にされては表面争うこともできなかったであろうから、いったん国家権力が互解し始めた場合、ふき出すように憎悪が表面化したとしても何の不思議もない。元好問の『遺山先生文集』巻十六に載する平章政事寿国張文貞公神道碑に

其後武夫悍卒、倚国威以為重、山東河朔上腴之田、民有耕之数世者、亦以冒占奪之、兵日益驕、民日益困。

とあるような情況であり、その結果は、続けて

貞祐之乱、盗賊満野。向之倚国威以為重者、人視之以為血讐骨怨、必報而後已。一顧眄之頃、皆狼狽於鋒鏑之下、雖赤子不能免。

と述べられるとおりの情況が現出したものと思われる。加えて、貞祐二年汴京に遷って後の国家経費はあげて僅かに残った山東、河南の農民達に転稼されてくる。肝心の河南は金室の南遷と共に黄河の氾濫で苦しまされる。しかも、『金史巻』一一〇、馮璧伝に

宣宗南遷、…時山東、河朔軍六十餘萬口、仰給県官、率不逞輩竄名其間。詔璧摂監察御史、汰逐之。総領撒合問冒券四百餘口、劾案以聞、詔杖殺之。故所至争自首、減幾及於半。

とあるように、この混乱に乗ずる者も続出する訳で、これが農民達に転嫁されては全くたまったものではなかったであろう。特に山東に多く叛乱が発生しているのは、宋と事を構える場合、もっとも負担をかけられるのがこの地方であったからに他ならない。以上のような主に経済的な理由以外に、異民族支配に対する反感がその根底にあったことも申すまでもない。女真民族の支配下にあっても、いつの日か南の人々が失地を回復してくれる、

そうした希望を北地の漢人達は失なわなかったに相違ない。乾道五年（一一六九）に北に使した楼鑰の北行日録（『攻媿集』巻一一一）にはそうした例がいくつか見られるし、宋の嘉定十二年（一二一九）金の元帥張林が山東の十二州をあげて来帰した折の表辞に「挙諸七十城之全斉、帰我三百年之舊主。」[15]と述べる。激烈な反金抗争の根底にこうした民族感情が横わっていたことも当然であろう。

このような諸原因が絡んで、金の支配力が減退した時点でふき出したのが山東の諸叛乱であったと思われるが、それではこれらの諸叛乱が、中国で概ね説かれるように、宋に対する義軍ということで一概に云いきれるものであろうか。義軍としての面は確に見られる。しかしながら、大安三年に叛乱を起した楊安児は官属を置き天順の年号を建てて明かに自立の意を表しているし、郝定もまた大漢皇帝を称していた。他方いったんは金に抗しながら再び金に降っている例も数多く見られる。その甚だしい例が国用安や時青の徒であるが、一概に義軍と称するには躊躇せざるをえない。ただ、彼等をして一貫して宋側について反金抗争を展開させえなかった理由の一班は宋側の態度にもある。『宋史』巻四十、理宗本紀に

（寶慶）三年春正月、辛酉、知楚州姚翀朝辞、奏淮楚忠義軍事。上曰。南北皆吾赤子、何分彼此。卿其為朕撫定之。

と見えるように概念的には彼此を分つ必要は何もない。が、実際は『宋人軼事彙編』巻二十所引の四朝聞見録に

紹興和議既堅。淮民始知生聚之楽、桑麦大稔、福建称之為楽区、負戴而至者、謂之返淮南士民至、淮民夏則以漿餽之、秋則剝棗寘諸門、任南人食之不取価、或遇父老烹牲於社、即命同坐、有留鑑者堅不受。自開禧兵変、淮民稍徙於浙於閩、至閩肆客飯待之。既帰、語故老曰、自後南人遊淮者、不復有壺漿剝棗之供矣。

とあるように、南宋の成立以後、時日の経過と共に北人が宋を懐かしむほどには南人は切実には考えていなかったものと見える。紹興以来南北に分断されていた現実が、あるいは両者に違和感を生じさせていたのではないか。従って山東の紅襖軍が義軍の立場を通そうとしても完全には宋側に立ちえない、いきおい自己保全を中心に行動せざるをえない、そこに一概に義軍とのみは断定できない面も生じていたのであろう。宋は悪い例を残していた。

『三朝北盟会編』巻二百三十に載る崔淮夫の劄子に

所謂恐変民心者、彼中百姓所以延頸本朝兵至、甚於時雨者、科役誅求、竭其膏血故也。彼民見本朝不動、或再講和議、疑為棄我、此後無復有望。謂如海州東海県徐元始因不堪其苦虐、殺其県令、称兵願帰正本朝。欲用本朝年号者、一年有餘、而本朝不招誘以来之。及其死也、又不旌褒以勧之。其敗也、海州之民指以為患、転以為戒。

と見えるように、これは金の海陵王の正隆年間のことではあるが、宋が頼みにならない例は一二に止まらない。従って金に抗して立ち上り、時に宋に帰正して宋軍と共に戦う。その限り義軍としての性格を有してはいるが、勢窮すれば金側の招降に応じ、また蒙古軍に降る。杜光簡「杭金義軍勢力之消長」[16]には「宋は紅襖賊を忠義軍と称して忠義糧を与え、これを利用して金に抗させたまでで、この輩の起事は金の政治の不良の致す所で、もともと滅金復宋の大旨はない。宋はこれを号して義軍となすけれども、紹興年間の義軍とは別である。」と述べる。滅金復宋の大旨はなかったとは云いきれないまでも、結果においては自衛のために金に抗して戦っていたという印象が強い。李全に関しても或る程度同じことが言えるのではないか。李全は宋に走って以後、金側の招降には応じてはいない。その限り反金という立場は通しているのであるが、宋史李全伝の記載に従えば、しだいに手段

を弄して自己勢力の拡大に動いて行く。そう仕向けていったのは宋朝の封建統治階級だという論法[17]もなり立つのであるが、結果的には山東に確たる地盤を築くというのが、宋に失望した李全の狙いであったであろう。彼がその兄の李福に膠西を守らせて、商人を招いて山陽（楚州）に至らしめ、その貨物を舟に積んで淮水から海に出て膠西に送り、陸路諸郡に送って貿易の利を収めたごとき、塩場の利を争ったごとき、まさに自己勢力の増大以外の何物でもない[18]。彼は中道で倒れるが、その自立の意図は彼を継いだ李璮に引継がれて、元初に隠然たる勢力を誇るに至る。その彼が、頼むべからざる宋を頼んで元に抗して、それが世祖の本格的中国支配のいとぐちになったことは愛宕松男氏の論考[19]に詳しい。

これまで見てきたように紅襖軍を中心とする叛乱軍は、一面では宋軍と合流して義軍としての役割りを果していた。しかしながら南宋側から見れば金朝治下の漢人は北人であり、紅襖軍はやはり北軍であった。同じ民族でありながらそう呼ばれざるをえなかったところに、紹興の純粋な金への反抗と異なって山東の反乱軍が義軍としての性格に徹しえなかった理由の一班が存したのではなかろうかと思われる。

おわりに

金末の山東の民乱は、直接的には支配者たる女真民族の苛酷な誅求に原因は求められる。そして支配者が異民族であったために、一部宋と結びながら民族闘争の様相を呈したが、結果的には彼等の抗争は実を結ばないままに消滅してしまった。農民軍であったために横の連携も不十分で、金朝打倒もならず宋側とも完全に同調できないまま続く元朝の支配下に吸収されて終っている。義軍とのみは言いきれない不徹底さは更に考えを続けてゆきたい。

なお趙儀生氏は前記論文の末尾に餘論として、紅襖と弥勒教との関連について問題を提起しているが、たいへん興味のある問題であるが今のところ確証がない。これも併せて後日の考究に俟ちたい。

註

① 文史哲一九五四年四月号、所収

② 歴史教学一九五五年六月号、所収

③ その他部分的に、沈起煒編著『宋金戦争史略』（湖北人民出版社、一九五八年）

④ 『明代史研究』創刊号、所収（一九七四）

⑤ 外山軍治「章宗時代における北方経略と宋との交戦」（『金朝史研究』所収）

⑥ 『金史』巻一〇二、僕散安貞伝

⑦ 『金史』巻一四、宣宗本紀上

⑧ 『金史』巻一〇三、紇石烈桓端伝

⑨ 『金史』巻一六、宣宗本紀下

⑩ 『宋史』巻四〇、寧宗本紀

⑪ 『宋史』巻四一、理宗本紀

⑫ 『金史』巻一一〇、楊雲翼伝

⑬ 註④

⑭ 外山軍治「章宗時代における黄河の氾濫」（『金朝史研究』所収）

⑮ 『宋史』巻四七六、李全伝

⑯ 責善半月刊第二巻第十七期所収（存萃学社編集『宋遼金元史論集』再録）

⑰ 『宋金戦争史略』一七二頁

⑱ 李全の評価に関しては註②論文。

⑲ 愛宕松男「李璮の叛乱と其の政治的意義」（『東洋史研究』第六巻第四号所収）